

## 講演会

講演会は無事に終わった。

形ばかりの質疑応答が終わると、多田ほのかは會長さんに案内されて別室に通された。

出されたお茶がおいしかった。

お茶を心から味わったことで、今日の講演が終わったのを彼女は感じた。

管理栄養士として、月に何度も講演をしているにもかかわらず、始まる前は緊張して、何を口にしたかも憶えていない。

聴衆の前で話し始めると、かえって落ち着き、楽しいくらいなのだ。

話すばかりだと聞き手が飽きるので、工夫を凝らす。

以前は黒板、この頃はホワイトボード、またはパソコンとつないだスクリーンを使う。

時によっては、軽い質問を聞き手に投げかける。

この人なら答えてくれそうだ、という相手を、話しながら探すのだ。

ほのかが呼ばれるのは、PTA主催の講演会、保健所主催の飲食店向け講演会など学校、官庁関係が多い。

企業向けのセミナー等も、近頃は少しずつ多くなっ

ている。

今日のようなごじんまりとした町会向けというのは、珍しかった。

町会会館の二階、八畳を二部屋開け放っている。なんともものどかだ。

窓を背に、ほのかは「家族も喜ぶ高齢者向けの食事」という演題で話をした。

畳の部屋だが、寺や割烹でも使っている、低めの椅子が用意されていた。

近頃は膝の悪い人も多いのだろうと、話しながら彼女は思った。

椅子を片付ける音を聞きながら、彼女は二杯目のお茶を飲み干した。

目の前には重箱があり、二色のおはぎが並んでいる。

きなこことこしあん。

「先生、もっと召し上がってください」と言われなくてもおかわりをしたにちがいない。

「おはぎ、おいしいですね。手作りではありませんか」

接待している小柄な女性が微笑んだ。

「そうなんです。」

先生におはぎを召し上がっていただくとうと、会長さ

んの奥さんが張り切って作ってくださったんですよ。

お邪魔でなかったら、お土産にお持ちになりませんか。

私たちもたくさんいただいていきますから。」

思いがけない贈り物だった。

ほのかは喜んで受け取った。

オフィスに戻ったら、お茶を入れてスタッフにおすそわけしよう。

そう思ったら、急に元気が出てきた。

しばらく雑談をしたあと、会長さんに挨拶し、ほのかは町会会館を後にした。

タクシーを呼ぶからと言われたが、夕方の町を歩きたかった。

駅まで十五分なら、大したことはない。

見知らぬ商店街をのぞきながら帰るのは、女性の楽しみだ。

先週の講演会の時も、見知らぬ商店街で乾物屋を発見した。

多種多様の豆が売っていた。

乾物だから、日持ちがする。

すぐに使わなくても大丈夫と、ついつい買い込んでしまった。

正月用の黒豆まであれこれ選んでいたら、とんで

もない重さになってしまい、宅急便で自宅に送る羽目になってしまったくらいだ。

「江上さあん」

後ろから声がする。

先ほど、町会会館でおはぎを包んでくれた女性だ。

自転車に乗っている。

前のかごに、荷物をたくさん積んでいる。

彼女の分のおはぎも入っているに違いない。

「すみません、お伝えした道、少し間違っていたんです。

二番目じゃなくて、三番目の信号を左折です。

駅に着くことは着くけど、商店街を通らないんで、申し訳なくて」

気の上さそうな顔に笑顔がのっかって、話していても気持ちがいい。

彼女は自転車を押して、ほのかの横を歩く。

「私は、あそこから右なんです。ちよっただけですが」

どこか変わった通りだと、歩きながら感じた。

最初、理由はわからなかったが、小さなイチョウの木を見てわかった。

「この通り、いろんな木がありますね。」

街路樹というには、バラエティに富んでいるような」

「やっぱりそう思うでしょう。」

会長さんは、いい顔してないんです。

見場が悪いって。

みんなが勝手に植えてしまっているからなんですよ」

自転車の女性は、いかにも申し訳なさそうな顔をした。

たしかにそのとおりだ。

歩いている間に、イチョウ、柳、モミジ、ツツジ、サクラの木を見た。

ゴムの木や巨大なアジサイもある。

なんの統一もない。

「ただね、いろんな花が季節ごとに咲くから、楽しいんです。

実をつける木も多いんですよ。

びわもあるし、梅もあるし、ほら、これは夏みかんです」

自転車をとめて、彼女は指差した。

濃い緑の葉をたくさんつけている木。

人間で言うくと中肉中背。

見上げると、葉と同じ色をした握りこぶしくらいの実があちこちに隠れている。

「実がなると、私もひとつ、こっそりもらってるんで

す。

酸っぱくて砂糖かけないと食べられないけど」

「鯛や鱈を三枚に下ろしてしめたものを、夏みかんの絞り汁かけるとおいしいですよ」

「やっぱり先生、プロですね。」

それなら、今年はまだ少しもらうことにしようかな」

彼女は立ち止まり、自転車のサドルに座りなおした。

「作ったら、会長さんに持っていくことにします。」

会長さん、あの夏みかん、抜こうっていつも言ってるから」

「それでは」と挨拶して、彼女は走り去っていった。

ほのかは思い出す。

幼いころ住んでいた家の庭にも、いろんな木があった。

けっして広い庭ではないのだが、びわや夏みかん、いちじくの木もあった。

どれも、食べた種を植えたもの。

苗木を買って植えたものではなかった。

だからいつまでも大きくならず、邪魔物扱いされていた。

それでも、ほのかは高校の頃、庭のびわを食べたこ

とがある。

実は小さくて甘いとはいえなかったが、ひとりで木に登り、木の上で食べた。

今度、お年寄り向けの講演会があったら、こんな話をしてみようかと思はのかは思った。

きっと誰もがそんな思い出があるに違いない。

この町の商店街が見えてきた。

夕暮れ時、店に明かりがつき始めた。